様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００００３５

研究課題名（和文）ヴィクトル・デルボスのスピノザ研究からみるフランスにおけるドイツ哲学の受容

研究課題名（英文）The Reception of German Philosophy in France through the Study of Spinoza by Victor Delbos

研究代表者
近藤　和敬（Kondo, Kazunori）

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授

研究者番号：９０６０８５７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、19世紀末に出版されたヴィクトル・デルボスによる『スピノザの道徳問題』の研究を中心に、その後のカントについてのデルボスの博士論文とそのフランス哲学会での討論の検討を踏まえて、フランスにおけるドイツ哲学の受容の特徴を捉えることを第一の目的とした。デルボスのドイツ哲学史の理解は、彼の師であるエミール・ブトルーの影響が大きく、とくにブトルーの弟子の世代で、大きく哲学史の研究スタイルに変化があったことを示した。また、この時代のスピノザ研究は、とくにドイツ哲学史の研究とセットになっていたこと、とくにドイツ近代哲学においてスピノザ哲学の果たした役割が注目されていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで自明史される傾向にあった哲学史研究の伝統とその変化を、具体的に19世紀末から20世紀初頭におけるフランス哲学におけるドイツ哲学史の受容を研究することで、哲学史研究それ自体に歴史性があることを明らかにした。このことは、哲学において研究対象のみならず、研究する主体の側のおかれているコンテクストを自覚させ、その両面をセットで研究することの意義と重要性を示すものである。このことはさらには、現在において歴史的対象として哲学者のテキストを研究する現在の我々にとって、自分たちが身を置いているコンテクストを自覚することの、哲学的重要性を示すものである。

研究成果の概要（英文）：The main objective of this research project was to capture the characteristics of the reception of German philosophy in France, based on the study of Spinoza's Moral Problems by Victor Delbos, published at the end of the 19th century, and the discussion concerning about Delbos' doctoral thesis on Kant at the French Philosophical Society. Delbos's understanding about the history of German philosophy was heavily influenced by his teacher, Emile Boutroux, especially in the generation of Boutroux's disciples, who showed that there was a major change in the style of research on the history of philosophy. It was also shown that Spinoza studies in this period were particularly set up with studies of the history of German philosophy, and that the role played by Spinoza's philosophy in modern German philosophy was particularly noteworthy.

研究分野：哲学・哲学史

キーワード：ヴィクトール・デルボス　フランス哲学　哲学史　スピノザ研究史　実証主義の哲学　フランスの実証主義　ドイツ哲学史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題「ヴィクトル・デルボスのスピノザ研究からみるフランスにおけるドイツ哲学の受容」では、十九世紀末から二〇世紀初頭にソルボンヌ大学で教鞭をとったヴィクトル・デルボス（Vicotr Delbos, 1862-1916）の哲学史研究を、とりわけ彼のスピノザ研究に注目し、それを当時のフランスにおけるドイツ哲学受容の文脈におきながら読み解いていくことを目的とする。なぜデルボスのスピノザ研究なのか。この点について説明するために、これまでの研究によって明らかになった本研究課題の学術的背景について述べなければならない。申請者はこれまで、「フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ」（科研費基盤 B、代表上野修、2013‐2016）および「二つのスピノザ・ルネッサンスの狭間―十九世紀フランス哲学におけるスピノザの影」（科研費基盤 B、代表上野修、2017-2020）で分担者として研究に参加し、一九世紀から二〇世紀にわたるフランス哲学におけるスピノザ哲学の影響関係について調査してきた。また「19－20 世紀のフランス哲学の動向に対する古代哲学研究の影響に関する研究」（科研費若手 A、代表近藤和敬、2016-2020）によって一九－二〇世紀のフランス哲学における古代哲学史研究の影響関係を明らかにするなかで、フランス哲学の全体的動向において占める哲学史研究の重要性と、その複層的な関係について明らかにしてきた。この複層的な関係は、フランスの隣国であるイギリスとドイツのそれぞれの哲学の受容の過程において異なる仕方で現れていることがすでにこれまでの研究によって示唆されている。そしてこの複層的関係がもっとも顕著に現れる例の一つが、フランスにおけるスピノザ研究・受容であり、さらにはこのフランスのスピノザ研究の動向が、二〇世紀後半の現代フランス哲学、たとえば第二次スピノザ・ルネッサンス（一九六〇年代のマルシアル・ゲルー、およびジル・ドゥルーズのスピノザ解釈以後のスピノザ研究の活況）において、その重要な文脈として作用していることがこれまでの研究によって明らかになってきた。とりわけ、「二つのスピノザ・ルネッサンスの狭間で」の科研において申請者は、一八九〇年代に登場する多くのスピノザ論のなかでの、デルボスのスピノザ研究の特異な位置を明らかにし、これが彼の弟子でありまたその強い影響を受けたと思われるマルシアル・ゲルーを介して、第二次スピノザ・ルネッサンスにその影響が表れていることを示唆した。本研究課題では、ここで示唆されるにとどまった道筋を、さらにデルボスの前期・後期の二つのスピノザ論（『スピノザ哲学およびスピノザ主義の歴史における道徳問題』（一八九三年）、『スピノザ主義』（一九一六年））の読解を通じて明らかにすることを目指すものである。デルボスのスピノザ研究とその成果についてはフランスにおいてすらほぼ忘れられてきたというのが現状であり、近年ようやくその再評価が始まったばかりである。したがって、この研究によって明らかになることの多くは、これまで知られていなかった新規性を多く含む可能性があり、今後の研究に大きく貢献するものと思われる。

２．研究の目的

デルボスのスピノザ研究とドイツ哲学研究の錯綜を解明するという本研究の目的を、そのスコープから二段階（T1, T2）に分けて説明する。

T1：一九世紀末から二〇世紀全体にかけてのフランス哲学の歴史を、より実態に近い仕方で理解することを可能にするための基礎的研究を蓄積すること。すなわち、著名な哲学者の著作を中心としながら、歴史的文脈から切り離してそれを分析するのではなく、それらの著作を実現可能にした歴史的・文化的・制度的な文脈のネットワークを明らかにしながら、そのなかに位置づけなおし、理解することを可能にすること。

T2：一九世紀末から二〇世紀にかけて、フランスで様々に異なる文脈のなかで参照されてきたスピノザ哲学の錯綜した文脈関係を明らかにすることで、それとかかわる研究や著作の意図や実現されなかった計画を浮き彫りにすること。

T1 はもっとも大きな目的であり、現状の現代フランス哲学史研究の方向性そのものにたいして、代替的な方法を提案するものである。現状では、ベルクソン、サルトル、メルロ＝ポンティ、レヴィナス、フーコーといった国際的にもよく知られた哲学者たちの著作の研究が主たる方法となっている。これらの著名な哲学者の著作を研究することには当然意味があるのだが、しかしそれらをよりよく理解するためには、彼らが実際に言及していたり、あるいは書かれてはいないが念頭に置いていたり、人間関係のなかで論争的な立場をとっていたりする文脈を理解する必要があるが、こういったことはその著作を読むだけでは明らかにすることはできず、地道な背景的文脈の研究を重ねるほかない。本研究はこういった方向性の研究の成果を公表することで、その価値を示すと同時に高めていくことをその目的としている。

また T2 では、たとえば、申請者がこれまで研究してきたジャン・カヴァイエスのスピノザ主義をめぐる問題について、一定の仮説を提供できる可能性がある。カヴァイエス研究においてはこれまで、カヴァイエスの最後の著作である『論理学と学知の理論について』で、彼の師であり、当時のスピノザ解釈において強い影響力をもっていたブランシュヴィックの哲学をカント主義あるいは認識論として批判し、これにたいしてスピノザの哲学を立てるという議論について、カント主義から離脱し、スピノザ主義への移行があったと多くの研究者によって指摘されてきた。

しかし、そのスピノザ主義の内実について、特にそれが何を参照していたのかについてまったくわかっていない。T2 ではたとえば、カヴァイエスのこのスピノザ理解を、一九三〇年代のデルボスから影響を受けたスピノザ解釈のいくつか（ゲルー、ラシェーズ＝レイ）からの影響関係において再現できる可能性がある。

３．研究の方法

本研究は基本的に、関連文献の探索および収集、収集した文献の読解と分析、分析した内容の整理とその内容をもとにした論文の執筆からなる。その意味で、典型的な文献学的研究となる。ただし、特定の哲学者の文研研究というよりも、特定の哲学者についての文研研究の背景となる研究態度や意図を、その特定の哲学者（ここではスピノザが重視される）の受容（ここではドイツ哲学における受容とイギリス哲学における受容が問題となる）の理解についての研究者間での変化（たとえば、クーザン、ブートルー、デルボス、ブランシュヴィック、ギュイヨーの間の違い）に着目するという方法をとるところに、特殊性がある。

４．研究成果

研究開始当初は、デルボスのスピノザ解釈の影響を洗い出すことで、カヴァイエスをはじめとした戦間期および戦後のエピステモロジーにおけるスピノザ主義の系譜を洗い出すことができるという仮定のもとで、研究を開始した。しかし研究を進めるにしたがって明らかとなったのは、デルボスのスピノザ解釈の特殊性と現代性は、彼がスピノザの名をまったく参照しないカントの『実践理性批判』解釈において、カント哲学とスピノザ哲学の並行性と断絶を試すところにあることが分かってきた。そしてこのデルボスの解釈の現代性は、現在ほとんど継承されておらず、歴史において孤立している（ただし、ゲルー、マトゥロン、ドゥルーズのなかに、部分的にはその影響の痕跡を残していることは明らかである）。

しかし、このことが明らかになる過程において、デルボスが『スピノザの道徳問題』を書いて応募して落選した 1890 年代初等のアカデミー懸賞において、懸賞課題としてスピノザの「道徳」が問題になるということを可能にした背景を掘り下げていくなかで、ブートルーによるヘーゲル派のドイツ哲学史の導入が 1870 年代にあり、そこでとくにカント以後のドイツ哲学におけるスピノザの受容の問題に注目が集まっていたことが示された。

また 1870 年代、ドイツ哲学に注目していたのは、講壇哲学におけるカント主義（ラシュリエ、ブートルー）のみならず、実証主義においてもそうであった。しかし実証主義の国際的な広がりにおいて特徴的であったのは、ドイツ哲学との関係においてのみならず、ある種、唯物論ないし汎神論の哲学者として、ニコライ・ハルトマンなどの源泉としてスピノザが参照されていたということであった。とくに、当時、実証主義においては、文学、道徳、社会学、政治学、犯罪学などの所謂モラルサイエンスの領域において、論争的な状況に置かれていたことが分かっており、その渦中にスピノザの『エチカ』がおかれていたことが分かってきた。そして、その文脈のなかで、スピノザのとりわけ『エチカ』第三部の感情論と、いわゆる自由意志の否定の議論が参照されてきたことを確認することができた。

このような背景は、ほとんどこれまで参照されてこなかったが、デルボスの同時代人でもあり、実証主義の哲学を継承する者でもあるエミール・デュルケムの議論のなかでも生きていることを確認することができた。たとえば、明示的に現れるのは、1883 年度におこなわれたサンス高校での哲学講義の講義録においてである。そこで登場するスピノザへの参照箇所と、同じ時期に書かれたドイツ留学の報告論文を突き合わせることで、そのことをみることができる。またデュルケムの『社会分業論』（1893 年）の記述においても一部見ることができる。またこのことは、ギュイヨーのスピノザ主義や、リボーのスピノザ主義、テーヌのスピノザ主義、レヴィ＝ブリュールのスピノザ主義（1880 年に書かれた「スピノザの感情の理論」を参照）といったところで繰り返し確認することができる。また、このようなものを前景化して書かれたのが、後にデュルケムとは別系統で実証主義の社会学を担うことになるルネ・ウォルムスによる『スピノザの道徳』（1892 年）だと理解できるのである。

デルボスの『スピノザの道徳問題』（1893 年）は、以上のような同時代の状況を背景として、比較的保守的な（デルボスは個人的信仰においてカトリックであるが、そのことを研究において全面的にだすことはなかったのだが）立場、つまりブートルーやブロシャールら先行世代の哲学史研究（この傾向はクーザン派に由来しつつ、ヘーゲル派の文献学的な哲学史研究の影響によってそれを乗り越えようとする立場）を延長する立場から書かれたものであるとみることができる。つまり、基本的にはヘーゲル哲学史の枠組みに基づきながらも、そのヘーゲルを輩出するドイツ哲学史の歴史的分析を、とりわけテキスト中心的に、いわゆる文献学的な手続きに基づきながら実現するというものであった。このスタイルは、現在の意味においても、実証的文献学的な手法として通用するものであり、その意味で、デルボスの哲学史研究は、現在的な方法の最初ではないが、初期の一つの成功例として位置づけることができる。

つまり、スピノザ哲学にたいする実証主義の立場からの（ある意味では過剰な）注目があるという時代状況を背景として、哲学史についての文献学的研究の立場から、スピノザ哲学の姿を提示する必要が生じていたことが、デルボスの研究を要請した背景であったことがわかる。

しかし、その後、実際には、多くの哲学者に影響を与えたのは、同時期に書かれたレオン・ブランシュヴィックの『スピノザ』（1893 年）であったという多くのフランス哲学者からの証言は、

単に実証的な文献学的研究が同時代の哲学に直截的な影響をもつことが少ないということ、そしてその時代において要請されている解釈が、むしろその研究が影響を与える影響を左右するということを示しているように思われる（ブランシュヴィックの解釈は、ヘーゲルに見いだされた精神の弁証法的進展に近いものを「フランス的」な「合理性の哲学者」としてのスピノザの『エチカ』に見出すものであり、後の世代に大きな影響を与えた。またこの「合理性の哲学者」の姿は、政教分離によって道徳教育を哲学教育が担うべしという哲学行政の方向性にとっても都合がよかったように思われる）。

以上の成果をまとめると以下のようになる。

１．デルボスのスピノザ研究は、現代的な価値をもつが、これまで十分に影響力をもってこなかった。

２．デルボスの哲学史研究は、現代的な意味での実証的な哲学史研究の、起源とは言えないが、初期の成功した一例である。

３．デルボスの研究の背景となっているのは、当時の実証主義の哲学におけるスピノザ哲学の受容とそれへの注目である。

４．実際の歴史のなかでの影響力の点でのみ評価する場合、実証的な研究よりも、その時代の要請に適合した解釈を提示したほうが影響力が大きいということが起こる場合がある。

以上の成果のうち、もっとも大きなポテンシャルがあると考えられるのは、３の実証主義の哲学におけるスピノザ受容であるように思われる。冒頭で述べたカヴァイエスをはじめとした戦間期および戦後のエピステモロジーにおけるスピノザ理解の起源は、ブランシュヴィックのそれではないだけでなく（この点については近藤和敬『カヴァイエス研究』による）、デルボスの堅実な哲学史的研究でもなく、それ以前から隠然とあった実証主義の哲学におけるスピノザ受容の蓄積とその反復的隆起であったという可能性が浮上してきた。今後は、以上を踏まえてこの点について、研究期間終了後も検討を加えていく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 近藤和敬	４．巻 51(8)
２．論文標題 計算と相互行為――特異性、共通部分、条件的なもの	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『現代思想 特集＝〈計算〉の世界』	６．最初と最後の頁 106-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 近藤 和敬	４．巻 27
２．論文標題 書評　中村大介著『数理と哲学：カヴァイエスとエピステモロジーの系譜』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 フランス哲学・思想研究	６．最初と最後の頁 265～268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51086/sfjp.27.0_265	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 近藤和敬	４．巻 51(3)
２．論文標題 ラトゥールの『地球に降り立つ』を読む ：「テレストリアル」の科学と特異なるものの多様体	５．発行年 2023年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 103-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　5件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 近藤和敬
２．発表標題 「新しい自然哲学に向けて――『人類史の哲学』へのプロレゴメナ」
３．学会等名 AAA「人間・社会・自然の来歴と未来--「人新世」における人間性の根本を問う」 プロジェクト第 3 回研究集会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 近藤和敬
２．発表標題 ポスト・ヒューマン時代の科学という問題について
３．学会等名 未来哲学研究所第七回シンポジウム「現代科学と人間性の拡張」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 近藤和敬
２．発表標題 「フランス・エピステモロジーにおける「概念の哲学」の再検討：想像力の論理と超越論的図式論」
３．学会等名 日仏哲学会2023年秋季大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 近藤和敬
２．発表標題 「社会哲学者としてのカンギレム――規範創造性の射程 ――ギヨーム・ルブラン（坂本尚志訳）『カンギレム『正常と病理』を読む――生命と規範の哲学』以文社、二〇二三年」はいかに読まれうるか――
３．学会等名 『フーコー研究フォーラム』（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 近藤和敬
２．発表標題 「レヴィナスの『存在の彼方へ』におけるスピノザからみる内在と超越の転倒 ――「現実」としての内在について――」
３．学会等名 第73回スピノザ協会「ミニシンポジウム：スピノザをめぐる内在／超越：デリダとドゥルーズの場合」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 近藤和敬
２．発表標題 「三木清の西田の絶対無の解釈から『構想力の論理』の読解へ ――三木のスピノザ解釈を手掛かりに――」
３．学会等名 京都学派およびポスト京都学派と科学哲学・技術哲学の現在（招待講演）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Kazunori Kondo
２．発表標題 Deterritorialisation, capitalisme et marche; - differentes directions de deterritorialisation et "formes futures" de philosophie
３．学会等名 ドゥルーズを超えるガタリ 後期ガタリ思想の再検討（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Kazunori Kondo
２．発表標題 La modernite; du concept d'espace chez Bergson
３．学会等名 Bergson Structuraliste ; Atelier autour du livre de Sebastien Miravete（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計5件

１．著者名 アラン・バディウ、近藤和敬	４．発行年 2023年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 152
３．書名 アラン・バディウ、自らの哲学を語る	

1．著者名 近藤和敬	4．発行年 2024年
2．出版社 月曜社	5．総ページ数 550
3．書名 『人類史の哲学』	

1．著者名 末木文美士、山内志朗、中島隆博	4．発行年 2024年
2．出版社 未来哲学研究所	5．総ページ数 376
3．書名 特集・現代科学と人間性の拡張	

1．著者名 森 元斎、森 啓輔、清水 知子、栗原 康、高橋 采花、近藤 和敬、中西 淳貴、渡辺 一樹、近藤 宏、成瀬 正憲、川上 幸之介、東 志保	4．発行年 2024年
2．出版社 以文社	5．総ページ数 312
3．書名 思想としてのアナキズム	

1．著者名 檜垣　立哉、山崎　吾郎、磯　直樹、里見　龍樹、山森　裕毅、小林　徹、久保　明教、近藤　宏、近藤　和敬	4．発行年 2022年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 260
3．書名 構造と自然	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関